ニュース

Nature と Science

自然科学系の雑誌として双璧をなす両誌に，ミツバチ関連の，興味深い，また重要な論文が掲載された．新聞等国内のメディアでも取り上げられたので，ご存じの方も多いことだと思う．

Nature 誌（10 月 26 日付）にはいよいよ解読の終了したミツバチ全ゲノムに関してその報告と研究の意義に関する解説が掲載された．The Honeybee Genome Sequencing Consortium を著者とする「セイヨウミツバチのゲノムから得られる社会性昆虫についての考察（Nature 日本版に掲載された和訳論題名）」の内容については，今後本誌でも紹介する予定であり，ここでは割愛するが，社会行動学の大家である Wilson 博士もこの号にこの成果へのエールを送っているし，昆虫の分子生物学研究を扱う雑誌 Insect Molecular Biology もこれを記念して，ミツバチ関連の論文だけを集めた特集号を刊行するなど，この分野は非常に盛り上がっている．このコンソーシアムには日本からも，畜産草地研究所の木村博士や東京大学の久保研究室をはじめ多数が参加している．玉川大学からの参加者がなかったことは残念としかいいようがないが，今後ゲノム情報をもとにさらなるミツバチ研究が進展することへの期待は大きい．

Science 誌（10 月 27 日付）には，わずか 1 ページの短報ながら，1 億年前（白亜紀初期）にミツバチの祖先となるハナバチがいた可能性を示す化石に関する記事が掲載された．白亜紀には植物が多様化しており，そこでのハナバチの介在はいわれていたものの，これまでに見つかっているハナバチ化石はいずれもそれより新しい第三期以降のものであった．今回，ミャンマー産の琥珀に閉じこめられていたミツバチ上科に属する蜂が，形態的な特徴からハナバチではないかと報告されている．その通りであれば非常に重要な発見であるが，これには一部で異論も出ている．次号に解説記事を掲載する．

農薬とクマ

昨年に続き，今年も岩手県をはじめ数件で，水田に散布された農薬が原因と考えられるミツバチの被害が見られた．日本養蜂はちみつ協会の行った実態調査（日蜂通信 522 号，10 月 25 日付）によれば，北海道と岩手でそれぞれ約 2000 群，山形，愛知でそれぞれ約 800 群など大きな被害も出ている．岩手県では県の養蜂組合が民事調停の申し立てを行う予定という新聞報道もあった．昨年の被害に基づいて散布時期の避難などの対策がとられたにもかかわらず，被害が拡大した．農薬散布が，農薬残留を厳しく監視するポジティブリスト制に移行したことでその様態も安全を目指す方向で変わりつつあるのに，養蜂での農薬害が逆に拡がっていることは，集約型農業を主とする日本で，新たに取り組むべき課題となりつつある．

また，台風や長雨などでドングリが凶作だったこともあり，クマによる養蜂被害も例年に較べて大きい．こちらも上述の日本養蜂はちみつ協会の調査によるが，全国 23 県で約 2000 群が被害を受けている．人がけがをしたなどで新聞報道されるものにも，自宅庭の巣箱や，神社の境内内の自然巣などがクマを引き寄せていたといった記事が多く，今後，養蜂家自身の人的被害が出かねない状況でもあり，クマ対応のマニュアル配布などもあるようだが，何らかの対策が待たれる．

編集後記　ハチミツブームもあってか，ミツバチを飼いたいという人が増えていて，よく相談を受ける．講演会や取材などでお会いする方には，ミツバチを飼うために引っ越された方もいるし，今号で紹介するように，自分のスタイルを開発する人もいる．こうした努力や工夫は，例え趣味であっても，いや趣味だからこそあって欲しいと思う．相談を受けたら「そういう覚悟はありますか？」と答えるようにしたいと思うようになってきた．クーデターで揺れるフィジーからは，養蜂の専門家ではなくとも，こうした活動ができるというよい参考例が届いた．（純）